



# 50の けん

#4

思い切って告白しちゃうぞ！ 編

著：藍澤たすく

イラスト：かもめ遊羽

# 「らのけん」のひなたじとなお話?

三郷学園高校「ライトノベル研究部」

——通称「らのけん」。

それは世にあふれるラノベを読みまくり、また自らも書きまくり、総合的にラノベへの造詣を深めることを主旨とした志しの高い部活動……のはず、なんだけれど……。アレ? 実際フタを開けてみたらなんか思ったよりなんかゆるくない?

だがしかし! それこそが「らのけん」の魅力! という感じで展開するまつり系日常部活「コメティイ」なのです!



緑川萌

ラノベと動物をこよなく愛する素直でまっすぐな女の子。その直情徑行さゆえに突っ走ってしまうことがあるのはご愛嬌。



白井華子

「らのけん」顧問教師……のはずが、見た目が一番幼いのため、部員からも「華ちゃん」と呼ばれ親しまれる癒し系な存在。そしてまさかのラノベ作家デビュー!?



**赤城操**

クールレビューイーな眼鏡っ子担当。微に入り細を穿つ綿密な設定作りには、らのけん内でも定評がある。



**黒田美玖**

愛情表現がセクハラチックなボーイッシュ女子。いつもそのターゲットにされる華子の苦労は、推して知るべし。何気にミステリラノベ好き。



**青山一斗**

らのけんの黒一点。なんにでもすぐに首を突っ込みたがる好奇心旺盛な性格の持ち主。

「はい。ではこの場合、こここの角CDEは何度になるでしょうか？」

華子は黒板に描いた図を指し示しながら、生徒たちに向き直り質問した。

5時間目。数学。

昼食後、一番眠くなる時間帯のせいか、教室には氣怠い空気が蔓延している。

「えーと、今日は13日だから……じゃあ出席番号13番の田端さん、答えてください」

「はい。……あの……」

「どうしたの？ 判らない？ 難しい？」

華子に当たられた三つ編み女子は困惑した表情を浮かべて口ごもつてている。

その様子に、華子は教壇からやや前めりになつて心配そうに女子生徒に声をかける。

「あの……そのイラストのどこが角CDEになるんでしょうか？」

「イラスト？」

華子は改めて黒板を振り返つて硬直した。

なぜならそこにジャ○ーズ風イケメンのイラストがどーんと描いてあつたからだ。

円と多角形が重なつた図を描いているつもりで、無意識のうちに華子が描いてしまつたものらしい。

「こ、これは!? ゴメンなさい！ これは違います！ 違うんです！ なんでもない！ なんでもないんですうー！」

華子は両手に黒板消しを持って、あわあわしながらばたばたとイラストを消していく。  
何この可愛い生き物。うちの黒板もぜひこうやつて消してもらいたい。まずその前に黒板買  
わなきやだけど。

「華ちゃん先生、それ彼氏？」

「かつこいーじやん！」

「えー、華ちゃんつきあつてる人いるのー？」

「どんな人？ 何やつてる人ー？」

「もしかして華ちゃん結婚するのー？」

「えー、マジでー！」

「しません！ そういう質問はプライバシーの心外です！ あたしは断固として遺憾の意、  
悪寒の尾を表明します！」

早口で応える華子の日本語は壊滅状態だった。よほど慌てているようだ。

キーンコーンカーンコーン♪

「はい、じゃあ授業終わりますー！ 今日できなかつた78ページから82ページの応用問題は明

日までに解いておいでくださいーー！」

えーなんだよー宿題多過ぎだろー横暴だーというぶーたれた声を背後に、華子はさつさと教  
室から出て行つてしまつた。

そして廊下の角を曲がつたところで、ふうーっとため息をつきながらハンカチで冷や汗を  
そつとぬぐつた。

「華ちゃん、さつき描いてたの『紺野さん』でしょー？」

「ひつ！」

振り返るとニコニコと笑みを浮かべる緑川萌の姿があつた。

「ち、ちがいます……」

「えー、だつて、ほらー？」

ぱいと顔を背ける華子の目の前に萌がスマホを差し出した。

「そつくりじyan？」

「!？」

そこには紺野司<sup>つかさ</sup>がアップでコーヒーを飲んでいる写真があつた。

どうやら先日の打ち合わせの時に萌が撮っていたものようだ。

確かにさきほど華子が黒板にでかでかと描いたイラストにそつくりのイケメン振りだった。  
「み、緑川さん！」

「何、華ちゃん？」

突然鼻息も荒く萌に詰め寄る華子。

「この写真あたしにも転送してもらつていいですか!?」

「いいけど？」

萌がぴぴっと華子に写真を転送すると、華子は早速もそもそもと自分のスマホをいじりだした。

「えへへ～♪」

やがて一連の操作を終えると、華子はとろけきった笑顔でスマホの画面に見入つていた。

どうやらさきほどの写真を待ち受けに設定したようだ。

「紺野さん、やつぱりかつこいいわよね、本当にアルバート様みたい……」

「華ちゃん、そんなに紺野さん好きなの？」

言われた瞬間、華子は頭からつま先まで瞬時に真っ赤になつた。

「しょしょしょしょんなことないわよ、こ、こんによさんは単なる担当さんであつてあのそのこの」

「そんなに好きなんだ！」

ニコニコしながら迫つてくる萌に、華子は思わず言葉を詰まらせる。

華子はしばらくの間、金魚のように口をぱくぱくさせていたが、やがて俯いてこう呟いた。

「……でも本当は怖いの……」

「え？」

「紺野さんのこと、好きなのは本当なんだけど……！ でも……！ その……！ なんていうか……！」

そこまで言つて華子は言葉を区切り、もじもじと身をよじり始めた。

「……この気持ちを紺野さんに伝えるのが怖いの……だつて紺野さんにとってはあたしは單なる担当作家の一人でしかないし……しかも新人賞拾い上げのペーぺーだし……もし告白して断られたりしたらそのあと絶対一緒に仕事なんかできっこないし……あたし、そんなのやだしどうでも紺野さん好きだし……」

「華ちゃん……」

もじもじしながらなんとか言葉を絞り出す華子を、萌はまじまじと見つめた。

「そして。」

「すごい！ 華ちゃんでもそこまで考えるんだね！」

「どーゆー意味ですかあー!?」

萌の心外な感心っぷりに、華子はぶりぶりと怒り始める。

「あははは、ごめんごめん。そっかー、（見た目が小学生だから忘れてたけど）華ちゃんも大人なんだね！」

「そんな、大人つてわけじゃないんですけど……」



(でも、今日は言わなきや……絶対言わなきや……) こんな気持ちのまま、原稿できないうもの……)

華子は胸の中で何度も何度も繰り返す

「あ、あの！」

「あ、あたし、紺野さんの事が…………す……ぎやーつ!?」

何もつまづく物のないはずの廊下で盛大にすつてんころりんした。

そして華子の倒れたその先には

ブッシュ!!

突然廊下が真っ白に染まつていく。

「あ、あ……」  
そう、華子が転んだ抱子に押し倒したのはなんと消火器だったのだ……

華子は顔面蒼白になつた。

なぜなら華子の目の前には消火器の粉で真っ白になってしまった司がいたからだ。

「すすすすみませんー！」  
あわ

華子は慌ててハンカチを取り出して司のズボンを拭くが、まつたくの焼け石に水状態だった。「こぼっこぼっ……。ははは、私は大丈夫です。それより白井さんお怪がはなかつたですか?」

「だ、大丈夫です！ あ、ああ、あたしなんてことを……」「ええええ、お怪我がなかつたなう良かつたです。でもお子

ないんで、ちょっと着替えてきますね。申し訳ないですけど、白井さん、先に会議室に行つて

「は、はい！ 本当にすみませんーっ！」

華子は何度も何度も「へこ。こと」と頭を下げる。司は、本当に氣にしないでくださいね、と言ひながら、夙夜と編集部の方に戻つていった。

会議室6。



華子は落ち込んでいた。

それはもうこれまでの人生の中で、最大に落ち込んでいた。

(もうドジッ娘とかそんなレベルじゃないよ、単なるダメ人間だよ、あたし〜……)

会議室のテーブルに突つ伏したまま、華子はじたばと両手両足を動かした。

その姿はまるで甲羅をつかまれて空中に引き上げられた亀のようだった。

(どうしよう……紺野さん来たらどんな顔していいのかわかんないよ、あたし〜……)

「すみません、お待たせしました」

会議室のドアが開き、司が颯爽と入ってきた。

華子はテーブルに顔を伏せたまま、びくっと身震いしたきり、ぴくりとも動かなくなつた。

というか、どんな顔をしていいのか判らずに動けなくなつた……というのが正確だった。

「どうしました、白井さん？」「こ気分でも悪いですか？　さつきのことなら本当に全然気にしないで大丈夫ですよ？」

「ほほほ本当にすみませ」

ぴょこんと立ち上がりつてまた謝罪を始めた華子だったが、目の前の司を見てまるで電源が切れたロボットのように動かなくなつてしまつた。

なぜなら。

目の前にタイトスカート姿の司の姿があつたからだ。

「あの……紺野さん……それ……」

「ああ、これですか？　私、普段はパンツしか穿かないんですけど、あいにく会社に置いてあつた着替えがこれしかなくて……やっぱり似合わないですかね？」

(え、ええええ〜〜〜！　もしかして紺野さんって……女人だつたの〜〜〜！)

華子の思考回路はショート寸前だった。

といふかすでにショートしていた。

「おーい、紺野ー、今日8時から『てけてけ』で女子飲みやつからお前も来いよ〜」

「こら、篠田！　こつちは今、打ち合わせ中なんだから！」

会議室の開け放しのドアから、司の同僚と思しきキヤリアウーマン風の女性が声をかけてくる。

司は苦笑いを浮かべながら入り口のドアを閉めた。

「すいませんでした、白井さん。じゃ、早速打ち合わせ始めま……白井さん？」

司の驚いた顔を見て、華子は初めて自分の両目からぽろぽろと涙がこぼれ落ちていて、に気がついた。

「どうしました、白井さん？　さつきのことなら、本当に気にしなくとも大丈夫なん

- 「らのけん！」シリーズ掲載号一覧
- GA文庫マガジン 7月24日配信号 …らのけん！  
 GA文庫マガジン 9月合併配信号 …らのけん！  
 GA文庫マガジン 10月27日配信号 …らのけん！
- 3 2 夢の最終選考編  
 はじめてのおつか…うちあわせ編

「どうじやない……そ、うじやないんです……あたし、あたし～～～」  
 嘸しゃべろうとすれば嘷しゃべろうとするほど、感情が昂たかぶつて言葉がうまく出てこない。  
 結局その後も華子は泣きじやくつてしまい、この日はまったく打ち合わせにならなかつたの  
 だつた。

「」で一句。

恋心 消火器ひとつで 鎮火ちんかされ  
 それでも続く ラノベ道みちかな

「うーまーくーなーい！（泣）全然うーまーくーなーい！（泣）」（華子）  
 「落ち着いてください、白井さん！ 一体誰と喋つてるんです!?」（司）

つづく